

総合的な学習「PEACE ステーション」

—国際理解学習の一事例として—

伊藤 幸洋*・佐藤 年明**

2002年度、「PEACE」と名づけた実践（4年・総合的な学習）を行なった。5つの国に関するGTに来てもらい、GTとの出会いをきっかけに、子どもたちが関心を持って調べたことを、子どもたちから発信する授業を構想した。

総合的な学習において、人との出会いを通しての「学習手段」「表現手段（コミュニケーションスキル）」「関わり合う力」の獲得が、どの内容においても必要であると考えた。

子どもの願いと教師の願い（ねらい）がうまく重なるように、子どもと教師がコミュニケーションしながら学習を進めていくことに、総合的な学習がうまくいくカギがあると考えた。

また、国際理解の内容を進める上では、「その人と仲良くなりたい」思いを引き出す必要性、GTの体験を聞くことに有効性があると考えた。これらの必要性・有効性とも、子どもたちと教師の学び合いによって達成されていくことを、本稿を通して述べた。

キーワード：PEACE、学習手段、表現手段、関わり合う力、コミュニケーション

（本稿は、伊藤・佐藤両名の協議をもとに、1～6を伊藤が、7を佐藤が執筆した。）

1 はじめに …「PEACE」実践へのいきさつ

1999年、私はモンゴルへ海外旅行に行った。旅行での貴重な体験を子どもたちに伝えたいと思い、受け持ちのクラス（当時5年生）に話した。子どもの反応はよかったが、もっと本格的に授業として計画できないか、という思いを持った。

2000・2001年度、三重大大学院に内地留学する機会を得、モンゴルに関する資料を収集し、「外国文化の授業づくり」として教材開発をした。この過程でつかんだものを、「モンゴル国の教材化に対する研究—国際理解学習の一事例として」^①で論じた。

また、「モンゴルクイズ」（2年生対象）の授業案を作り、桑名、鈴鹿、伊勢、四日市など、6学級で飛び込み授業をした。この過程で見え

てきたものを、「ヤッター!『馬頭琴』だ!!—国際理解学習の一事例として」^②で論じた。

「モンゴルクイズ」では、私がゲストティーチャー（以下、GT）になり、子どもたちに情報を発信した。逆の発想で、いろんな国のGTの方に来てもらい、GTとの出会いをきっかけに、子どもたちが関心を持って調べたことを、子どもたちから発信する授業ができないか、と考えた。

2002年度、4年生（2クラス・46人）での総合的な学習において、「PEACE」と名づけた実践を行なった。大学院を通してつながりができた留学生の康鳳麗さん（中国）・朴貞宣さん（韓国）、ALT指導員のナタリーさん（カナダ）、研究で何回か旅行している佐藤年明さん（スウェーデン）、同じ職場で1年間の留学経験のある井本宏美さん（オーストリア）の5つの国のゲストティーチャーを招くことからスタートした。

2 総合的な学習における「国際理解学習」のねらい …先行研究の概観

加藤幸次は、総合学習は、子どもたちの生活

* 員弁郡東員町立笹尾東小学校
** 三重大学教育学部学校教育講座

や経験に基礎をすえて学習活動が構成され、展開されなければならない、と述べている。そして、次のように述べる。

「もちろん、教師の役割は重要である。ただし、子どもたちの興味や関心あるいは発想を組織し、子どもたちの主体的な学習活動を支援するという意味においてである。念を押しておけば、教科学習のように教師の側にねらいや願いがあるのではない。」⁽³⁾

はたして、教師にねらいや願いがなくていいのだろうか。子どもの興味や関心、発想から学習活動がスタートすることは賛成であるが、子どもたちの思いを実現できるように支えるに当たって、教師の願いがあるのは自然なことである。教師の願いがなければ、子どもたちに教育的関わりができない。

国際理解学習を進める上で、教師はどのようなねらいを持つべきか、第十五期中央教育審議会（中教審）が提出した第一次答申「二十一世紀を展望した我が国の教育の在り方について」を見ながら考える。「国際化と教育」で、次の3点に留意して教育を進める必要があると述べている。

- (a) 広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- (b) 国際理解のためにも、日本人として、また個人としての自己の確立を図ること。
- (c) 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。⁽⁴⁾

つまり、多様な異文化の生活習慣・価値観についての「違い」を「違い」として認識し、相互の歴史観・価値観を尊重し合う態度を育成しなければならない。また、自分の思いを表現できるコミュニケーション能力の育成も必要である。

私は、総合的な学習において、人との出会いを通しての「学習手段」「表現手段（コミュニケーションスキル）」「関わり合う力」の獲得が、どの内容においても必要であると考える。

子どもの願いと教師の願い（ねらい）がうまく重なるように、子どもと教師がコミュニケーションしながら学習を進めていくことに、総合的な学習がうまくいくカギがあると考え。うまく重なることで学習が成功するケースもあるし、教師が予期せぬ子どもたちの願いが実現するケースもある。後者のケースがあるからこそ、子どもたちと教師の学び合いがあり、教科学習にはないおもしろさがそこにあると考える。

「総合的な学習」の実践報告では、総合学習の教育課程上の位置づけや年間計画、取り組みの紹介にウェイトが置かれ、総括の部分では「教育環境（教育課程上の位置づけ、時間の確保、人的環境の必要性、学習テーマの設定）」の指摘や「これからの意気込み」を書いているケースがほとんどである。

事前に考えた「教師の願い」と事後に到達した「子どもたちについて力」の分析が、ほとんどなされていない。本論文では、総合的な学習における「教師の願い」と「子どもたちについて力」の分析を行いながら、「PEACE」実践を通して見えてきた、「総合的な学習」「国際理解学習」において大切な観点をまとめる。

3 「PEACE」のねらい 大切にしたいこと

(1) 「国際理解学習」「総合的な学習」の観点からのねらい

4月の授業でモンゴルと中国のお金を紹介したところ、子どもたちからたくさんの質問を受けた。このことをきっかけに、子どもたちからも外国に関する物を教室に持ってきて、クラスで紹介することがいくつかあった。それは、外国の地での生活や旅行者の体験に興味・関心があるからだ感じた。GTとの関わりから、子どもの疑問を生かした「外国文化」をテーマに

学習を構想した。

外国文化に触れながら「平和」について考えて欲しい願いと、カメラに向かって「ピース」するほど元気な4年生という意味から、この学習を「PEACE」と名付けた。

単元を構想する際、「国際理解」の観点から1つ、「総合的な学習」の観点（こだわる→もとめる→あらわす）から4つ、ねらいを考えた。

① 外国の人や外国への旅行者と出会い、その国に関することを調べることによって、今までなじみがなかった国のことに興味を持つようになる。【国際理解】

② 1学期の総合でしてきたことから発展し、外国に関するGTの話を書くことによって、外国のことについて調べたいという思いを持ち、調べたいテーマをはっきりさせる。

【こだわる段階】

③ 調べたいことを、図書やインターネット、Eメールなどを使って調べる。【もとめる段階】

④ 中間報告会や日常の掲示板を使って調べたことをクラスや全校に報告したり、ポストイットを使って「質問」や「アドバイス」「もっと調べたいこと」をもらったりして、課題探求を進める。【もとめる段階】

⑤ 目的、対象、方法をはっきりさせて、調べてきたグループで協力して、学習してきたことを発表する。【あらわす段階】

(2)「子どもたちの姿」からのねらい

学年当初の子どもたちの様子を見てみると、聞く姿勢ができていなかったり、挨拶の声が小さかったり、発言に対して反応が弱かったり、トラブルを自分たちで解決しようとしなかったりしていた。これは、相手に自分の思いを伝える「話す力」と、相手の思いをしっかりと「聞く力」、お互いに関わり合おうとする「コミュニケーションしようとする力」が弱いと考える。

これらの弱さから、教師に対して「…でもいいですか」とすぐに尋ねてしまう、自信のなさにつながっているととらえた。もっと自分を表現してほしい・仲間と関わり合ってほしい・先のことを見通す力を持ってほしい、と願う。

その場を総合的な学習の場でも作りたかった。

子どもたちの興味を予想しながら、学習の流れを大まかに構想しておき、授業を組んでいる。授業を進めていく中で、大切にしたいことがはっきりと見えてくる。

今回の「PEACE」で大切にしたいことを、箇条書きにする。

【「学習手段」のねらい】

- ・5人のGTとの出会いから、その人の国を知りたいという思いを持ってほしい
- ・様々な手段で調べられることを知る
- ・様々な手段でまとめられることを知る
- ・メディアの見方を考えるきっかけにしてほしい
- ・活動の一区切りごとに、これまで総合で使ってきた「振り返りカード」を書かせ、ポートフォリオを作りながら、自分の考えを書き続け、自分の成長に気づいてほしい

【「表現手段（コミュニケーションスキル）」のねらい】

- ・質問することの良さを感じてほしい
- ・学習発表会で、大きな声を出したり大きな動きをしたりして、自信をつかんでほしい
- ・まとめる段階で「反省会」を持ち、子どもたち同士で感想や質問、アドバイスを出し合ってほしい

【「関わり合う力」のねらい】

- ・クラスの枠を超えて関わり合ってほしい
- ・子どもの思いを綴らせ、「学年通信」や「学級通信」を通して、子ども同士や親へ思いを交流してほしい

これらのねらいに迫りながら、国際理解学習、課題発見力、課題追求力、様々な表現力（パソコンも含む）、仲間と協力する力を高めていきたいと考えた。

4 「PEACE」学習の流れ（全50時間）

4月から10月までは、両クラスともクラスごとの取り組みをしていた。1組では、「しょうかい」（自分が紹介したい物を持ってきて、そのことについてクラスで質疑のやりとりを行

う)を通して、外国にちなんだ発表を聞いている。2組では、「えいごリアン」(英語学習)を通して、英会話に慣れ親しんでいる。「国際理解」に対する関心が生まれた上で、11月から学習を始めた。

授業ごとに「振り返りカード」を書かせ、次の学習につなげるようにしてきた。

「子どもたちに他の子の思いを広げる」「親に内容を伝える」「実践記録にする」の3つのねらいから、取り組みをデジカメ画像入りの「学年通信」にまとめてきた。画像を廊下の掲示板にも掲示してきた。

(1) 総合学習「PEACE」との出会い (2時間)

「外国に行ったことがある人」と尋ね、その国名といつ何をしに行ったのか、世界地図を使いながら、確認した。そして、「PEACE」の名前の由来、今後の予定を話した。「外国の人や外国に旅行した人から、お話を聞くことができます。どんなお話を聞きたいですか」と尋ね、子どもたちの外国への関心を持たせた。

(2) 5人のGTと出会い、聞きたいことを質問する (5時間)

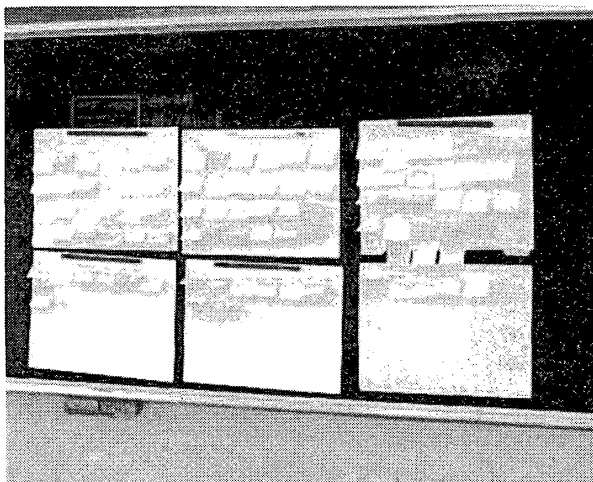
ネイティブの立場から、朴さん(韓国)・康さん(中国)・ナタリーさん(カナダ)、外国人旅行者の立場から佐藤さん(スウェーデン)、留学体験から井本さん(オーストリア)のGTを招いた。

「話15分+質問30分」の形式で、5人のGTの方に質問した。子どもたちの興味は、外国語のあいさつ、トピックにあった。インタビューで知ったことを各自プリントにまとめた。



(3) 「ポストイット」で調べてほしいことを整理する (4時間)

全員が5つの国について調べてほしいことを「ポストイット」に書き、その国の色画用紙に貼り付ける(質問力)。各班で担当の国を決め(各クラス1班ずつ)、ポストイットを整理しながら、調べる項目を分類する(情報整理力)。



(4) 各グループで調べ学習をする (8時間)

「パソコン検索の仕方」や「Eメールの使い方」を教え、パソコンを使う学習方法を伝えた。

GTとEメールで質問をしたり、パソコン検索で調べたり、放課後に町の図書館で調べたりした。その内容をグループごとにポスターにまとめた。



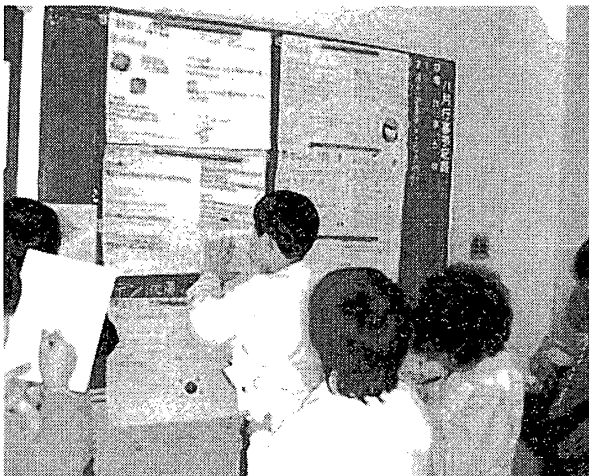
(5) ポスターセッションをする (4時間)

国別にまとめたポスターを掲示し、20分間で「いい所」「アドバイス」「更に調べてほしいこと」の3観点に沿って、個々にプリントに記入した。それを学年で出し合った。

意見が出たことを参考にし、グループで「調

べるポイント」を1つに絞り、「具体的に調べ
る内容」「役割分担」「(冬休み中に)調べに行
く日時」を相談した。

冬休み明けに、調べた報告をした。

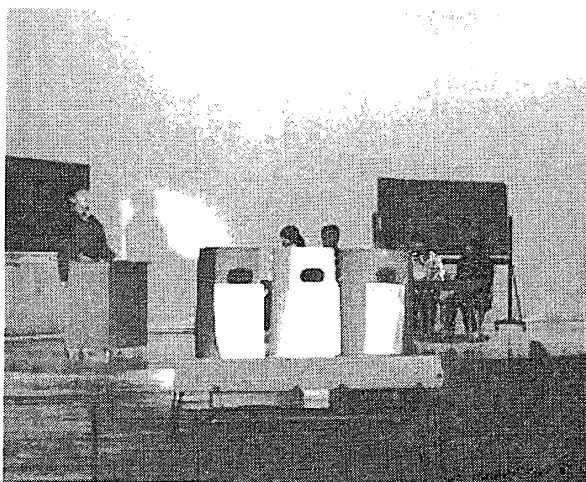


(6) 「ニュースステーション」から学ぶ (1時間)

今までに見たことのある「ニュース番組」から、「ニュース番組の分かりやすい工夫」を話し合った。そして、「ニュースステーション」のビデオを見て、ニュース番組の構造を知り、学習発表会に生かそうとする意欲を持った。

(7) 「PEACEステーション」を作り、「笹っ子発表会」で報告する (20時間)

学習してきたことを「ニュースステーション」風にまとめ、「笹っ子発表会」で全校や家の方に報告することにした。自分たちの手で台本づくりをした。そして、劇や発表の練習後に「反省会」を持ち、自分たちで振り返る場を作った。その中で、周りの人に思いを伝えることを繰り返し意識させていった。



(8) 発表会を振り返る (2時間)

発表会の「反省会」を持ち、「良かったこと」「こうすればよかったこと」を確かめ合った。

そして、「PEACE全体の取り組みを通して自分についての力」というテーマで作文を書いた。

(9) ポートフォリオづくりをする (4時間)

パソコンで、作文の原稿を入力し、まとめの「振り返りカード」を書いた。

今まで書いてきた「振り返りカード」や「調べてきた資料」「発表会台本」「作文・PEACEステーションを終えて」「学年通信・PEACE」を整理し、「表紙」に写真をつけて1冊の「ポートフォリオ」として綴じた。

(10) おまけ「PEACEの旅」

活動の打ち上げ・学年の思い出の意味も込めて、理科学習「星空観察」と関連づけながら、プラネタリウム・図書館・グループ別遊びのツアーを組んだ。

5 「PEACE」で子どもたちについてきた力

3学期、子どもに「PEACE全体を通して自分についての力」、親に「笹っ子発表会の感想」を書いてもらった。この感想を紹介しながら、「PEACE」の学習を通して、子どもたちについてきた新しい力を3つ述べる。

(1) 素直に指摘し合う力 ～見つけ(周りを)

私が「PEACE」でついてきた力は、もちろん発言する力です。

なぜかと言うと、私はどんな時でも恥ずかしくて発言できなかったけど、1月くらいからすごくたくさん話せるようになった。国語や算数であまり発言しなかったけど、「PEACE」をきっかけで、たくさん発言できるようになりました。

笹っ子発表会での反省会の時、自分なりにたくさん発言できたから良かった。

(「発言する力」・A子)

練習が終わるごとに、周りの動きを見つけるために、学年で「反省会」を持ってきた。「良

かったこと」と「アドバイス」を出し合う中で、自信をつけたり、お互いに指摘し合ったりしながら高まってきた。話す機会をたくさん設けたことで、自分たちで周りを振り返る力がついてきた。

(2) 段取り力 ～見つめて(自分を)

発表会の為にだけの題材ではなく、普段の学習から取り組んできた題材で、それぞれ子どもが内容を理解し、自信を持って発表している姿が見られました。はっきりした口調で、間を取りながら、聞き取りやすい話し方ができていたと思います。

家では、「誰が休んでも、代わりができるようにしておくんだよ」と、毎日声を出して、台本すべてを読む練習をしていました。クラスの一員として頑張っている姿に、子どもの成長を感じました。(親の感想)

休んだ子に備えて、自分から他の子のセリフを練習している姿である。クラス・学年の一員として、自分ができることを見つめている。セリフだけでなく、動きや道具の出し入れなど、複雑な動きが求められる。「段取り力」は、全体を見て、全体の中での自分の役割を考え、先のことを考えて行動する力である。この力は、将来仕事をすることに当たり、必要不可欠な力である。

(3) ハプニングに対応する力 ～見通して(全体を)

「グーデンモルゲン。こちらは…」

Cちゃんがセリフを言って、オーストリアの場面がついに始まった。

Dちゃんがくしゃみをして、Eくんがクイズを出しました。一年生や二年生には人気だろうなと思っていた時、Eくんがほんの少しだけ間違えてしまい、番号①②が入れ替わってしまった。

でも、すぐにFちゃんがクイズの答えを言うCちゃんに、

「①のハンカチって言ってね。」

と、とっさに教えてあげて、大きな失敗をせずにすみました。それを見ていた私は、「オーストリアは、すぐ助け合いができる

んだな。いいグループだな」と思いました。

(以下省略)

(「オーストラリアアップレ」・B子)

生放送は、筋書きのようにはいかない。三択クイズ形式で内容を伝える場面で、問題を出す子がクイズの番号を言い間違えてしまった。とっさに次の子がフォローした姿である。ハプニングはこれだけでなく、最後の合唱の時に、テープの曲が2分ほど流れなかった。この時に慌てずにじっと立ち続け、中には「自分たちで歌い始めればよかった」と考えていた子も何人かいた。

このようにハプニングに対応できたのは、それまでの練習によって自信を持てたことと、全体の流れをつかんでいたのを見通しを持って行動できたからである。

これらの力は、発表会の場で明らかに見ることができた。だが、発表会の場だけでなく、それまでの活動全体を通して力が蓄積されていたからこそ、発表会での姿になったのである。

6 双方向のコミュニケーションのあり方

「2」で、私は、総合的な学習において、人との出会いを通しての「学習手段」「表現手段(コミュニケーションスキル)」「関わり合う力」の獲得が、どの内容においても必要であると述べた。

学習活動を始める前に「ねらい」を立て、「ねらい」を達成させるために学習の流れを考えた。大まかな流れは変わらなかったが、学習当初には予想していなかった子どもたちの動きがいくつか見られた。

学習当初とは予期せぬ子どもたちの姿から、「方法的なコミュニケーションのあり方」(1)と「内容的なコミュニケーションのあり方」(2)(3)の二面から述べる。

(1) 総合学習での教師の指導性 … 「学習手段」「表現手段」「関わり合う力」の獲得への道筋

5人のGTとの出会いの場の設定や質問の仕

方、メモの取り方、ポストイットでの整理の仕方、パソコン・Eメールの使い方、調べ学習のまとめ方、ポスターセッションの仕方、台本の作り方、劇での発表の仕方、ポートフォリオの作り方など、節目節目で学習方法を指導してきた。

これらのように、本実践は、他の実践と比べて教師の指導がかなり入っている。それは、学習当初の「ねらい」を意識しているからである。この「ねらい」に到達できるよう、節目節目の学習方法（学習システム）を教師が提供してきた。

この「学習システム」の中で、自分たちでプランを作り活動を進める中で、子どもたちは段取りと見通しをつかんでいく。自分たちの見通しが立ち、うまくいく成功体験を通して、今までできなかったことができるようになる。それが、新しい自分との出会いであり、自分の成長になる。

当初の教師の「ねらい」（願い）と、「5」で述べた「学習後について子どもたちの力」とは、違ってきている。これは当然である。総合的な学習は、子どもとともにコミュニケーションしながら、教師も学んでいくものである。学習活動の中で必要に迫られながら、「学習手段」「表現手段」「関わり合う力」を学んでいくのである。これらの力は、日常に使える力になっていく。

ともすれば「なるべく教師の出場がない方がいい」などと言われ、教師の指導を遠慮しがちである。自分たちでできる方法があれば、もちろん子どもたちに任せる方がいい。だが、その方法を獲得していない段階で子どもに任せきりにしてしまうのは、自主性尊重のように見えて実は無責任であると考ええる。

したがって、「学習手段」「表現手段」「関わり合う力」を獲得する方法を指導する必要があると考える。その方法を獲得することで、次に自分たちで活動する時に、その方法を自分たちで選択と実行することができるのである。それが、いい意味での「子どもの自主性」である。「5」で述べた「ハプニングに対応する力」が、この事例である。

(2) 「その人と仲良くなりたい」思い …異文化で生きる方とのコミュニケーションのあり方

今回、子どもたちは5人のGTと出会った。事前の予想では、子どもたちの興味はGTの国の文化や生活にあると考えていた。ところが、子どもたちの質問が多かったのは、GTその人のことに関する質問や、その国の挨拶の言葉であった。それは、GTと仲良くなりたいという思いがあるからだと感じた。

出会いが終わった後、子どもたちはGTにサインを求めに行った。これは、GTとの出会いがとても楽しかったが、今後、もう会うことはないだろうと考え、この時の楽しい思い出を後から振り返るために、形として残しておきたいと考えたのだろう。

GTとの出会いから、その国のことを知るだけ为目的にするのであれば、他の人であっても構わないし、直接の出会いがなくても書物やインターネットなどから知ることができる。知るための手段ではなく、「その人と仲良くなりたい」思いがあるからこそ、GTとの出会いに価値があると考ええる。

今回のGTの方も、ただ外国の情報を伝えるために学校に来てもらったわけではなかった。その国の紹介を通して、「子どもたちと仲良くなりたい」思いがあったことを学習途中から感じた。お互いの「仲良くなりたい」思いが双方向につながることを、事前に構想できていなかった。

出会いの後にたくさんの知りたいことがでてきたことが、たくさん貼られたポストイットからも分かった。また、EメールでGTに再度質問したいという思いや、「笹っ子発表会」に見に来てほしいという思いも湧いていた。学校に来ていただいたのは1回だけであったが、「直接の出会い」をきっかけに、「その人のことを知りたい」「その国のことを知りたい」思いが湧いてくるのが、たびたびあった。このことは、「国際理解」で大切なことであると考ええる。

一方的な出会いでは、情報収集に終わり、コミュニケーションにならない。調べたことを再度GTに返して交流することが、双方向のコミュニケーションになる。

今回は、GTとの「出会い」をきっかけに、その人・国のことを「調べる」活動に移り、その内容を「他の人へ」伝える活動に発展した。時期的なことから、発表会にはGTの方には2人しか来ていただくことができなかった。もっと交流できる時間を取ることができたら、よりコミュニケーションが深まったことだろう。

(3) 「その人の話りたい」思い … 「違い」から学ぶ

今回は、GTとの授業において、「話 15分」+「質疑 30分」+「振り返りカード 5分」という構成で行った。それは、子どもたちにとって自分の知りたいことを質問する方が、目的を持って聞くことができるので、静かに集中でき、知識を効果的に習得でき、GTとコミュニケーションを取ることによって親しくなれると考えたからである。

最初の「話」の部分では、その国を象徴する物を紹介しながら話してほしいと、事前の打ち合わせで確認した。その結果、韓国では「チョゴリ」、スウェーデンでは「オーロラや街並みの写真」、中国では「年賀状」、カナダでは「カナダの動物の写真」、オーストラリアでは「留学生生活で得た写真やパンフレット」の実物を中心に話が進んだ。このことにより、子どもたちは、その国に対するプラスのイメージを持ち、イメージを膨らませていった。

翌年、私は6年担任になり、メリエンさん(マレーシア人)に来ていただいた。その時も「質疑」と「振り返りカード」の時間も取ったが、「話」の部分にメリエンさんが話されたいことを中心にしてもらった。マレーシアの歴史のこと、民族のこと、18年前に日本に来てからの苦労話・いい話をたくさん語ってもらった。この時の感想を一人紹介する。

今日、マレーシアのメリエンさんに来ていただいて、お話を聞いた。

マレーシアの人は差別がないと思った。日本に来た最初の頃、「〇〇人だから」とか言われたらしい。でも、今は、何人(なにじん)だからって別にどうってことない

ということが分かった。それはとてもいいことだと思う。

日本にも、たくさんの外国人はいる。今は、別に普通のことだと思うけど、昔はジロジロ見ているから、そんなに珍しかったのかな。

でも、今はそれが普通のことになってよかったと思う。今回の話を聞いて、私は、相手が違う土地の人でも、同じ「人」だから、特別に見てはいけないと思った。

あまり短い文にはまとめられないけど、メリエンさんからはとてもいいことを学べたと思う。私は、パワーがたくさん体の中に入っていった。(6年・G子)

4年生に対する実践では、多くの人と出会い、多くの国のことを調べながら、様々な表現手段を使う活動をして、コミュニケーションスキルを獲得していくことにねらいの重点を置いた。

6年生に対する実践では、日本に来ての思いを聞き、2つの国の共通点・違いから学んでいる。「異文化理解」という観点からすると、日本文化と外国文化の比較・問題点を扱うことも、「国際理解学習」として踏み出す必要があると、子どもの感想から感じた。

本実践を通して、総合的な学習を進める上では、「学習手段」「表現手段」「関わり合う力」を子どもたちに獲得させていく必要があると考える。

また、国際理解の内容を進める上では、「その人と仲良くなりたい」思いを引き出す必要性、GTの体験を聞くことに有効性があると考えられる。

これらの必要性とも、子どもたちと教師の学び合いによって達成されていくことを、本実践を通して述べた。

7 終わりにー共同研究者として

伊藤さんが「1」で述べているモンゴルに関する教材開発と「授業行脚」のかなりの部分において、私は大学院の教官としてお手伝いをさ

せていただいた。

私は、本学大学院教育学研究科で「教育課程特論演習」という通年授業を担当しているが、2000年度は、たまたま伊藤さんと一对一の授業となった。その授業でお互いに最近訪問したフィジーとモンゴルのことを語り合い、日本人にとって必ずしも馴染み深いとは言えないこれらの国々を取り上げて、国際理解学習を行なうことはできないか、その可能性を話し合った。

私のフィジー研究の方は、残念ながらその後頓挫してしまっていたが、伊藤さんのモンゴル研究は、実践者仲間から授業の依頼が飛び込んだことで俄然本格的に発展していった。その経緯は、註記にある2編の報告に詳細に述べられている。

伊藤さんは、テレビ番組などを参考にしながらクイズ形式を導入して、飛び込み授業での初対面の子どもたちを楽しい学習に巻き込んでいった。そして、これを「飛び込み授業」行脚と名付け、自らもその活動を楽しんだ。伊藤さんのプラン作成に協力し、2つの学校での「飛び込み授業」を参観した私は、「他校教師がGTをつとめること」の良さを実感していた。

しかし、このような「授業行脚」は、自校での実践に多忙な現場教師にはなかなかできることではない。伊藤さんが大学院在学中であったことが、このような画期的試みを可能にしたと言えよう。

学校現場への復帰後、伊藤さんは「ゲスト」ではなく「常任」で授業を運営していく立場から、国際理解学習の構想を発展させようと考えた。その端緒的段階の報告が本稿である。

私は、今回も「スウェーデン旅行の経験者」として授業の一部に参加することができた。メールでの事前質問、当日の授業、そして事後のメールでの補足質問とそれへの返信、発表会の参観と、いずれも大変楽しい活動であった。

今回の実践の成果については多方面から評価することができようが、私はとりわけ、伊藤さんも報告中で強調している、学習活動を通じての子どもたちのコミュニケーション経験の蓄積、コミュニケーション能力の形成に注目したい。

「授業行脚」は楽しい活動だったが、基本的に一度限りの出会いだった。子どもたちの能動

的参加を引き出すためにクイズ形式をとったが、それに対する子どもたちの反応は、個々のクイズ問題において完結するものだった。今回の実践でも、確かに5人のGTとの授業での出会いは、各1時間に限定されていたが、パソコン活用の指導の意味も兼ねたメールによる事前・事後のやりとりもあり、限られた条件下でも可能な限り双方向のコミュニケーションが図られている。

さらに、当事者・体験者からの外からの情報提供だけに頼らず、子どもたち自身による各国の情報収集が始まるが、そこでもポストイット利用のコメント、ポスターセッションと相互評価など、お互いに集めた情報を吟味しながらのコミュニケーションが行なわれている。

さらに全校での発表会に向けては、ニュース番組のシミュレーションという、「メディア・リテラシー教育」も取り入れ、「伝える」というコミュニケーション活動を十分意識して学習全体を締めくくっていく。

ここでは触れられなかったが、本実践にはコミュニケーション以外にも様々な学習活動体験が盛り込まれていて、方法的に見てもまさに「総合的学習」の名にふさわしい。

伊藤さんの「国際理解学習」実践の今後のさらなる発展に、大いに期待したい。

【 註 】

- (1) 森脇健夫・伊藤幸洋「モンゴル国の教材化に対する研究－国際理解学習の一事例として」『三重大学教育実践総合センター紀要』第21号 2001年
- (2) 伊藤幸洋・森脇健夫「ヤッター!『馬頭琴』だ!!－国際理解学習の一事例として」『三重大学教育実践総合センター紀要』第22号 2002年
- (3) 加藤幸次・佐野亮子編著『小学校の総合学習の考え方・進め方』黎明書房 1998年 P.13
- (4) 亀井浩明・有園格・佐野金吾『中教審答申から読む21世紀の教育』ぎょうせい 1996年 P.218-219